アグニの神

芥川龍之介

青空文庫

一

支那の上海の或町です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加人と何か頻に話し合つてゐました。

「実は今度もお婆さんに、占ひを頼みに来たのだがね、――」

亜米利加人はさう言ひながら、新しい煙草へ火をつけました。

「占ひですか？　占ひは当分見ないことにしましたよ。」

婆さんは嘲るやうに、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げても、御礼さへ碌にしない人が、多くなつて来ましたからね。」

「そりや勿論御礼をするよ。」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取つて置くさ。もしお婆さんの占ひが当れば、その時は別に御礼をするから、――」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想がよくなりました。

「こんなに沢山頂いては、反つて御気の毒ですね。――さうして一体又あなたは、何を占つてくれろとおつしやるんです？」

「私が見て貰ひたいのは、――」

亜米利加人は煙草を喞へたなり、狡猾さうな微笑を浮べました。

「一体日米戦争はいつあるかといふことなんだ。それさへちやんとわかつてゐれば、我々商人は忽ちの内に、大金儲けが出来るからね。」

「ぢや明日いらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから。」

「さうか。ぢや間違ひのないやうに、――」

印度人の婆さんは、得意さうに胸を反らせました。

「私の占ひは五十年来、一度も外れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね。」

亜米利加人が帰つてしまふと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「恵蓮。恵蓮。」と呼び立てました。

その声に応じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦労でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頬は、まるで蝋のやうな色をしてゐました。

「何を愚図愚図してゐるんだえ？　ほんたうにお前位、づうづうしい女はありやしないよ。きつと又台所で居眠りか何かしてゐたんだらう？」

恵蓮はいくら叱られても、ぢつと俯向いた儘黙つてゐました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺ひを立てるんだからね、そのつもりで

ゐるんだよ。」

女の子はまつ黒な婆さんの顔へ、悲しさうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？　忘れちやいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すやうに指を挙げました。

「又お前がこの間のやうに、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺さうと思へば、雛っ仔の頸を絞めるより――」

かう言ひかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、恵蓮はいつか窓側に行つて、丁度明いてゐた硝子窓から、寂しい往来を眺めてゐるのです。

「何を見てゐるんだえ？」

恵蓮は愈色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、さう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に会ひ足りないんだらう。」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかつた、年の若い一人の日本人がありま す。それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらく は呆気にとられたやうに、ぼんやり立ちすくんでしまひました。

そこへ又通りかかつたのは、年をとつた支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでゐるか、お前は知つてゐないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりかう問ひかけました。支那人は楫棒を握つた儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？　あすこには、何とかいふ印度人の婆さんが住んでゐます。」と、気味悪さうに返事をすると、※々行きさうにするのです。

「まあ、待つてくれ。さうしてその婆さんは、何を商売にしてゐるんだ？」

「占ひ者です。が、この近所の噂ぢや、何でも魔法さへ使ふさうです。まあ、命が大事だつたら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いやうですよ。」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考へてゐるやうでしたが、やがて決心でもついたのか、さつさとその家の中へはひつて行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんの罵る声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いか、一股に二三段づつ、薄暗い梯子を馳け上りました。さうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはひつて見ると、そこには印度人の婆さんがたつ

た一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見当りません。

「何か御用ですか?」

婆さんはさも疑はしさうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占ひ者だらう?」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨み返しました。

「さうです。」

「ぢや私の用なぞは、聞かなくてもわかつてゐるぢやないか? 私も一つお前さんの占ひを見て貰ひにやつて来たんだ。」

「何を見て上げるんですえ?」

婆さんは益疑はしさうに、日本人の容子を窺つてゐました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方知れずになつた。それを一つ見て貰ひたいんだが、——」

日本人は一句一句、力を入れて言ふのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子さんとおつしやる。私は遠藤といふ書生だが——どうだね? その御嬢さんはどこにいらつしやる。」

遠藤はかう言ひながら、上衣の隠しに手を入れると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？　香港の警察署の調べた所ぢや、御嬢さんを攫つたのは印度人らしいといふことだつたが、――隠し立てをすると為にならんぞ。」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる気色が見えません。見えない所か唇には、反つて人を莫迦にしたやうな微笑さへ浮べてゐるのです。

「お前さんは何を言ふんだえ？　私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありやしないよ。」

「嘘をつけ。今その窓から外を見てゐたのは、確に御嬢さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握つた儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにゐる支那人をつれて来い。」

「あれは私の貰ひ子だよ。」

婆さんはやはり嘲るやうに、にやにや独り笑つてゐるのです。

「貰ひ子か貰ひ子でないか、一目見りやわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこまうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはひられてたまるものか。」

「退け。退かないと射殺すぞ。」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くやうな声を立てたかと思ふと、まるで電気に打たれたやうに、ピストルは手から落ちてしまひました。これには勇み立つた遠藤も、さすがに胆をひしがれたのでせう、ちよいとの間は不思議さうに、あたりを見廻してゐましたが、忽ち又勇気をとり直すと、

「魔法使め。」と罵りながら、虎のやうに婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躱すが早いか、そこにあつた箒をとつて、又掴みかからうとする遠藤の顔へ、床の上の五味を掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といはず、口といはず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋風に追はれながら、転げるやうに外へ逃げ出しました。

三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影を口惜しさうに見つめてゐました。

「折角御嬢さんの在りかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴へようか？　いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りしてゐる。

万一今度も逃げられたら、又探すのが一苦労だ。といつてあの魔法使には、ピストルさへ役に立たないし、――」

遠藤がそんなことを考へてゐると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、――もしや御嬢さんの手紙ぢやないか？」

かう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾ひ上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん円な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違ひない、消えさうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家(ウチ)ノオ婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私ノ体ヘ、『アグニ』トイフ印度(インド)ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ツテヰル間中、死ンダヤウニナツテヰルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ予言ヲスルノダサウデス。今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、気ガ遠クナツテシマフノデスガ、今夜ハサウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ真似ヲシマス。サウシテ私ヲオ父様ノ所ヘ返サナイト『アグニ』ノ神ガオ婆サンノ命ヲトルト言ツテヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖(コハ)イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダラウト思ヒマス。ドウカ明日(アシタ)ノ朝

モウ一度、オ婆サンノ所ヘ来テ下サイ。コノ計略ノ外ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サヤウナラ。」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、余程運が好くないと、――」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでせう。今まで明るかつた二階の窓は、急にまつ暗になつてしまひました。と同時に不思議な香の匂が、町の敷石にも滲みる程、どこからか静に漂つて来ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拡げながら、頻に呪文を唱へてゐました。書物は香炉の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせてゐるのです。

婆さんの前には心配さうな恵蓮が、――いや、支那服を着せられた妙子が、ぢつと椅子に坐つてゐました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはひつたであらうか？　あ

の時往来にゐた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違ひではなかつたであらうか？——さう思ふと妙子は、ゐても立つてもゐられないやうな気がして来ます。しかし今うつかりそんな気ぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使ひの家から、逃げ出さうといふ計略は、すぐに見破られてしまふでせう。ですから妙子は一生懸命に、震へる両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移つたやうに、見せかける時の近づくのを今か今かと待つてゐました。

婆さんは呪文を唱へてしまふと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立つた儘、両手を左右に挙げて見たり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするやうに、そつと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子を見てゐたとすれば、それはきつと大きな蝙蝠か何かが、蒼白い香炉の火の光の中に、飛びまはつてでもゐるやうに見えたでせう。

その内に妙子はいつものやうに、だんだん睡気がきざして来ました。が、ここで睡つてしまつては、折角の計略にかけることも、出来なくなつてしまふ道理です。さうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違ひありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないやうに、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとひ一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死んでもよろしうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺せるやうに、御力を御貸し下さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおひおひと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼(どら)でも鳴らすやうな、得体(えたい)の知れない音楽の声が、かすかに伝はり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える声なのです。

もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆さんの姿でさへ、気味の悪い夢が薄れるやうに、見る見る消え失せてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使ひが、床(ゆか)の上にひれ伏した儘、嗄(しはが)れた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寝入つてゐました。

五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使ふ所は、誰の眼にも触れないと、思つてゐたのに違ひありません。しかし実際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗(のぞ)いてゐる男があつたのです。それは一体誰でせうか?——言ふまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往来(わうらい)に立つたなり、夜明けを待たうかとも思ひました。

が、お嬢さんの身の上を思ふと、どうしてもぢつとしてはゐられません。そこでとうとう盗人のやうに、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透き見をしてゐたのです。

しかし透き見をすると言つても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香炉の火の光を浴びた、死人のやうな妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははひりません。しかし嗄れた婆さんの声は、手にとるやうにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

婆さんがかう言つたと思ふと、息もしないやうに坐つてゐた妙子は、やはり眼をつぶつた儘、突然口を利き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のやうな少女とは思はれない、荒々しい男の声なのです。

「いや、おれはお前の願ひなぞは聞かない。お前はおれの言ひつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に悪事の罰を下してやらうと思つてゐる。」

婆さんは呆気にとられたのでせう。暫くは何とも答へずに、喘ぐやうな声ばかり立ててゐました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかつたら、明日とも言

はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」

遠藤は鍵穴に眼を当てた儘、婆さんの答を待つてゐました。すると婆さんは驚きでもするかと思ひの外、憎々しい笑ひ声を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に欺される程、耄碌はしてゐない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人ぢやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか。」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿体なくもアグニの神の、声色を使つてゐるのだらう。」

さつきから容子を窺つてゐても、妙子が実際睡つてゐることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顕したかと思はず胸を躍らせました。が、妙子は相変らず目蓋一つ動かさず、嘲笑ふやうに答へるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言ひつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらつたやうです。が、忽ち勇気をとり直すと、片手にナイフを振りな

がら、片手に妙子の頭髪を掴んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟に身を起すと、錠のかかつた入口の戸を無理無体に明けようとしました。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が摺り剥けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたやうです。遠藤は殆ど気違ひのやうに、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えてゐるばかり、人気のないやうにしんとしてゐます。

遠藤はその光を便りに、怯づ怯づあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはひつたのは、やはりぢつと椅子にかけた、死人のやうな妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかつてゐるやうに、厳かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん。」

遠藤は椅子の側へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶつたなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやつと夢がさめたやうに、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん?」

「さうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げませう。」

妙子はまだ夢現のやうに、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だつたわ。つい私が眠つてしまつたものだから、——堪忍して頂戴よ。」

「計略が露顕したのは、あなたのせゐぢやありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑つた真似をやり了せたぢやありませんか?——そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしさうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠つてしまつたのですもの。どんなことを言つたか、知りはしないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭れながら、呟くやうにかう言ひました。

「計略は駄目だつたわ。とても私は逃げられなくてよ。」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大変です。」

「だつてお婆さんがゐるでせう？」

「お婆さん。」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさつきの通り、魔法の書物が開いてある、――その下へ仰向きに倒れてゐるのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐました。

「お婆さんはどうして？」

「死んでゐます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかつたわ。お婆さんは遠藤さんが――あなたが殺してしまつたの？」

遠藤は婆さんの屍骸から、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、――しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、――運命の力の不思議なことが、やつと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だつたのです。

「私が殺したのぢやありません。あの婆さんを殺したのは今夜ここへ来たアグニの神です。」

遠藤は妙子を抱へた儘、おごそかにかう囁きました。

（大正九年十二月）

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1998年12月11日公開
2004年2月8日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アグニの神

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/